
鎮魂課

蓮千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎮魂課

【Nコード】

N6080A

【作者名】

蓮千里

【あらすじ】

不思議な能力を持った少年少女。そんな彼等の居場所は警視庁。でも、鎮魂課なんて聞いたことありますか？

ファイル1

強い思いほど、のせやすく

思い強いほど、風は強い……

風は吹く。

桜の木を通り過ぎ、

桜の花びら舞い落ちる……

よって

鎮魂課
↳ 強気思いは風に

これは、不思議な能力を持つ少年少女のお話です。

ドピュンッ

そんな音が届くほどの強風が春日東高校生徒達に襲い掛かる。

まるで裂く様な風。

木々の枝や草々は実際に切られていく。

枝が切れるのなら、人間の皮膚や服なども同じこと。

風は容赦なく人を、自然を切り刻む

辺りに血が飛び散り、自然が壊れていく奇妙な強風がおこす現象。

この4月上旬で8件目に上っていた。

校長は、どうすべきか迷いつつも意を決したように、電話へと手を伸ばす

暖かい光は、春日東高校に繋がる桜並木や、その道……アスファルトで出来た道を照らしていた。

風は優しく通り抜け、草々を揺らし、音を奏ていく。

それはとても静かで、心地よく……子守唄と錯覚するほどに。

チリン……

幻聴だろうか。

かすかに鈴の音が響いたように感じたのは。

チリン・チリン……チリン……

幻聴ではない。

どこかで確かに鈴が響いているのだ。

ただ、それが何を意味し、一体持ち主はどこに居るかわからないが。

風がやんだ。

だが、鈴の音は止まらない。

目を皿のようになしてみても、人影は見当たらない。

なのに、鈴の音は止まない。

ザワザワザワ……

先程より強めの風が吹く。

木々が草々が叫ぶような音を奏で始めた。

今度は、土ばかりまでもが起るほどに。

すべてを、包み込んでしまつほどの土ぼこり。

チリン！

鈴の音が今までで一番大きく、それでいて力強く鳴り響いた。

ただの一度だけ。

その直後に

シュッ

そんな擬音語が合うような音をたてて、

「カクレンボは性に合わないの」

声の主であろう人影が空から舞い降りた。

太陽が照らした人影がハッキリとうつる。

少女だ。

どこにでもいそうな

10代半ば位の少女。

黒のボブは燃えるように紅いピンで留められていて、黒い大きな瞳は強い意志を持っていた。

だがこれは顔立ちだけのこと。

少女の姿は、街中では珍しい格好……巫女の姿。

紅いはかまに白い着物。

これを巫女といわずになんとなのか。

「逃げられないよ？」

表情も、声音も、『怒り』ではなく『悲しみ』や『同情』が混じっていた。

「逃げられないよ？この三神の鈴からは」

もう一度、少女は言い、右手をゆっくりと挙げた。

チリン……

鈴がひとりでに音を奏でる。

もとい。

1つの紅い鈴が少女が挙げた右手の中に現れた。

それを少女は、驚きもせずただ真っ直ぐ前を見つめながら喋っている。

目の前には開けた公園がみられるだけなのに。

少女は話す。

瞬きひとつせずに。

どぴゅんっ

と風が強く吹くのと

「^{けいせつ}
蛍雪！」

と少女が叫び、鈴を空へと投げて飛び上がるのはほぼ同時。

チリン

風の音でかき消されない鈴の音なんてあるのだろうか。

まあ、風が吹くから鈴は鳴るのだろうが、この強風の中でも、こんなに静かに鳴る物なのだろうか。

紅いはかまに白い着物の巫女姿は、青い空に良く映えた。

「^{これ}
強風を通すわけにはいかないんだよね」

はかまをなびかせ、少女がアスファルトに足をつけた時、少女の右腕はどうみても人間の腕じゃなかった。

紅蓮のように紅く……それが強固だということがみただけでわかる……一言で言うなら棍棒。

「『紅蓮の花びらよ戒めとなれ。盾となり、自然を護りたまえ』
”蛍雪”」

右腕を正面に向け、その中間部に左手を乗せ、真っ直ぐ構えた少女が詠唱し、”蛍雪”と言った時。

紅蓮のように紅い棍棒から、紅い光が放たれる。

詠唱どおり、光は少女を護り、自然を護り、そして少女が見えていく相手の動きを封じた。

強風が止まったのが何よりもの証だ。

「よーやく姿を見せたね。てか見えるようにしたんだけどさ」

少女は紅蓮の花びらに動きを封じられた者 男の子へと歩み寄る。

何の警戒もせず、鼻歌を歌いそうな感じで。

太陽が少女達を照らし出す。

少女の右腕が、一層強固になったように見えるのは錯覚だろうか。

「んで？キミ、何歳？なんで春日東高校の生徒ばかり襲ったわけ？

どーみても小学生っしょ？」

少女の言うとおり、相手はまだ小学2年……いや1年かもしれない。

それくらい小さく、幼い男の子だったのだ。

着ている服も、流行のアニメキャラが印刷されたシャツに、活発さが表れている土ぼこりだらけの靴にズボン。

今の時代にしては珍しい格好だ。

なにしろ今の幼い子供達は、家に閉じこもり、ゲームやPCで遊ぶ子供が多いのだから。

先程までの口調とは全く違う、砕けた口調に男の子は驚いたようだ。

目をパチクリさせたまま、少女をひたすら見つめる。

「おーい。何か言ってくれ。じゃないと……」

少女が困ったようにしゃがみ込むと、突然影が差す。

少女は『あゝあ』というように左手で顔を覆い、男の子に『馬鹿』と目で訴えるが、そんなものが通用するはずがない。

「……操、いつになったら鎮魂できる？」

苛々した声が少女、操にグサグサ刺さる。

「あのねー。鎮魂する時は必ず『理由』を聞くって決まってるでしょ？源^{みなもと}」

そう言いながら、操は立ち上がり後ろを振り返った。

操の真後ろにいたのは、青いはかまに白い着物をきた少年。名は源というらしい。

多分年は、操と同じくらいだろう。

操と同じ、黒髪に意志の強い黒の大きな瞳を持つ少年は、操とは逆に長髪。

特別に髪をゆんだりしていないので、風が吹く度揺れている。

「今の状態の右腕だと、誰も喋らんとと思うが？」

「……」

源の一言に固まる操。

確かに、今のままだと怖いだろう。

その上、目の前で人間の腕から、紅蓮の棍棒^{こんぼう}になり、男の子の身動きを封じたのだ。

何も喋れなくなるに決まってる。

操は右腕を見つめ、口を開きかけるがすぐに口をつぐみ、

「……だからって今、元に戻せというわけ？」

「そんな馬鹿なことをしようとしたのか、お前は」

キツと睨む操に対し、呆れ口調で近づいてくる源。

どちらが勝者が聞くまでもない。

「ひっこめ」

「……っ」

すれ違いざまに源は、冷たく言い、操はそれに従うしかなかった。

「おいボーズ。あんましテメーの姉貴を悲しませんな。お前は知らねーだろうが、姉貴はすっげー心配してんだぜ？」

上から見下ろされる形で話しかけられた男の子は、身体を丸め、上目遣いで源を見る。

はつきりいつて、とてつもなく怖がらせている。

だが、そんな男の子がふいに顔を上げた。

『姉貴』という単語を聞くなり顔を上げ、目を見開いた。

操のときの見開きと違つのは明白だった。

「操」

「言われなくとも、連れてきてるよ。あ、どうぞこちらに」

四つ角マークを浮かべながらも、操は源の言われるまま、ひとりの少女を連れてきた。

少女は操の言われるまま、ゆっくりと足を運び、男の子を前にした。

瞬間。

少女は男の子に駆け寄り、抱きしめる

が

それは叶わなかった。

どうみても普通の男の子なのに、少女は男の子に触れられない。

その原因を少女も男の子も分かっているはずなのに。

少女は何度も抱きしめようとし、男の子は何度も抱きつこうとする。

それが、幾度繰り返されたか。

春香が抱きしめようとしている男の子は綾杉徹。小学2年。

2人は早くに両親を亡くしていたが、遺産を継ぐことにより、生活費などには苦労しなかった。

それもこれも、両親のお陰である。

そんな境遇の中、春香は高校1年となり、徹は小学2年となった。

歳の離れた姉弟だが、とても仲が良く近所でも評判の2人。

しかし、それは1ヶ月前に幕が下りていた。

「……な・んで……とお……る……」

春香は弟に問う。

『なんで』の中にさまざまな意味を込めて。

本来ならこの世に存在しない弟、徹に。

徹はゆっくりと口を開き、目に涙を溜めながら姉に叫ぶように話す。

だが、声は春香に届かない。

何を言っているのか、言いたいのかわからない。

「……誕、生日」

突然、春香の耳に聞こえた言葉。

それは操の声だった。

右腕を抑え、少し辛そうに顔を歪ませた操。

続けて何か言いたそうだったが、彼女の前に源が一步出て、正確に言葉をつぐ。

「綾杉春香。あんた誕生日はいつだっけ？」

源に言われて、ハツとする春香。

彼女の誕生日は4月10日。もうじきだ。

そして、誕生日といえば

「 プレ……ゼン、ト？」

信じられないといった様子で春香は弟を見、源を見る。

徹はしょんぼりして、源は『それ以外何がある』といった様子で見下す。

「毎年やってたんだろ？あんたはボーズにバイトで稼いだものを買ってやってた。

だが、ボーズはいつも花束やら折り紙やら……とにかく金のかからないものをあんたに贈ってた。

けど、今年はどうしても”金で買ったもの”をあんたにやりたかった……だろ？ボーズ」

徹に向けた後半の言葉に、コクコクと上下に首を振る徹。

急にせわしくポケットを探り出すが、お目当てのものは一向に見つ

からないらしい。

服までを脱ごうとした時、少し顔色の悪い操の左手が徹の目の前に差し出される。

「お探し物は、やっぱりこれ？」

そう言っただけ差し出したのは、桜色の手鏡。

正方形で角には、桜のイラスト入りの可愛い手鏡だ。

見るなり徹は頷き、手にとるが、あちこちに亀裂が入っているのを見て、またもやしょんぼりしてしまう。

肝心の鏡に至っては、使い物にならないであろう。

「あんたがやる小遣いやお年玉を貯めて買ったらしい。それ、限定品なんだろう？」

源が春香に問う。

彼の言うとおりだった。

この手鏡は、有名メーカーの限定物。

特別ブランド物ではないのだが、春香はこのメーカー商品を愛用している。

買えない額ではない。ただ、時間がなかったのだ。

部活の引継ぎやら受験やら……とにかくめまぐるしい毎日が続いていた。

限定商品とは、その日の午前中に売り切れになる率が高い。

そうじゃなくとも、受験を前にした春香に買いにいく余地などあるはずがない。

それを徹に愚痴ってはいたが、仕方ないという気持ちが大半を占めていた。

今はそれどころじゃない と言いつけていた。

しかし、姉思いの徹はそうは思わなかったらしい。

「春香さんは4月から高校生。徹君はそのお祝いを買ったためにあの日出かけ……事故に巻き込まれた。」

でも、春香さんに、どうしても渡したくて成仏できず、ここを彷徨っていたわけです」

「あんたに気づいてほしくて風を使っただよ。風が自分をあなたの元に運んで欲しいがために。」

被害者が春日東高校の生徒だけだったのは、あんたがあそこの生徒だからだ」

操と源の言葉に、膝をつく春香。

ゆっくりと顔を上げ、決して触ることの出来ない弟に手を伸ばす。

が。

ニツコリ笑いながら、春香の目の前から姿を消した。

風と共に……

「と、おる……？」

風が優しく吹く中、春香は弟の名を呼ぶ。

本当に、今度こそ会えないと知りながら、手鏡をきつく握りしめアスファルトにうずくまる。

紅い涙が、制服を汚し、アスファルトに滴り落ちる……

人は、強い思いを持って死に至る場合もある。

そしてそれが強いほど、成仏できず、何かと怪奇現象を起こす原因となるらしい。

だが、そういう霊は、『原因』となるものを解決できれば、大人しく天へ召されるのだ。

プルルルル・プルルルルル……

狭い部屋に鳴り響く1本の電話音。

だが、誰も取る者は居ない。

人が居ないのだから当然といえば当然だろうが。

プルルル・プルルルル……プルルル・プルルルル……

それでも未だに鳴り響く電話音。

狭い部屋の静寂は、完全に崩壊している。

部屋の中は沢山の書類が散らかっており、食べかけのカップヌードルが置いてあった。

虫でも沸きそうな小汚い部屋。

プルルル……カチッ

そうこうしている間に、電話が留守電に変わったらしい音が響いた。

『はい、こちら警視庁・鎮魂課』

電子音は確かにそう流れ、『ピーッ』と留守録合図を鳴らす。

『コード番号01・操。春日東高校の鎮魂終了。コード番号02・源と共に帰宅中。詳細は後ほど』

ブチッ

留守録の終了合図ではなく、電話をかけてきた本人、操が切ったらしい。

留守録は正常に処理されたく、赤い点滅が静かに動く……

電話が置いてあるデスクの上に、紙が乱雑においてある。

床はもっと凄いのだが その中に紛れ込んでいた1枚の紙。

パッと見、写真と名前が違ってくるくらいにしか見えないが

警視庁・鎮魂課

コード番号：01 操（MISAO）年齢：14

出身地：警視庁

学歴：なし

コード番号：02 源（MINAMOTO）年齢：13

出身地：警視庁

学歴：なし

嘘のような言葉が並べられていた。

そして紙の最期に押されているハンコには、朱色ででかかと『鎮魂課』と押されており、

その下に走り書きのような名前がペンで書かれていた。

管理責任者：紅琳

ファイル1（後書き）

NOZOMI、IFに続き無謀にも鎮魂課を投稿するRueです。
更新遅くなりますが、必ず更新はしますのでよろしく願います。
それから、鎮魂課へ強気思いは風によつてとありますが、
波線の間言葉は、たぶん毎回かわりますのでご了承ください。

Rue

ファイル2

「ね、知ってる？ケータイの浮遊霊って」

「浮遊霊？」

「うん」

「被害ってどんなのよ」

「えーと電流が走ったり、突然水が被ったり……だったかな」

「なにそれ。あつけない浮遊霊ね」

「うん、でもね」

「……なによかしこまっちゃって」

「雨の日の夜9：30以降にケータイを使わないほうがいいんだって」

「なんで？」

「浮遊霊に取り付かれて、命を落とすから」

「ちょ、マジな顔で言わないでよ」

「だって、本当に死んだ人があるんだよ？」

「偶然に……」

「私も、そう思いたいよ」

外は雨が降り続けている。

『ケータイの浮遊霊』

これをどこで誰に聞いたか、彼女は覚えていない。

ただ、いつのまにか9：30以降に電話やメールをしなくなっていた。

プルルルルル・プルルルルル・プルルルルル……

新栄塾が終わった午後9：30。

及川悟は、おいかわ さとるケータイから家に電話していた。

昼間の青空が嘘のような、ザーザー降りの雨。

昼間が昼間だったので、雨傘は持ち合わせていない。

学校をでる時、久々に雨がやんでいたので傘を持ってこなかった。

家からも近い新栄塾。

わざわざ持つて行くほどの量にはならないと踏んだのが大きな間違
いだった。

このところ雨が降り続けていたのだから、持つて来るべきだった
のだ。

「って、今更悔やんでもしやーねえか……」

怒られる覚悟で親に迎えに来てもらおうとケータイを鳴らす。

だが、誰も出る気配がない。

「っかしーなー……今日、母さんパート休みのはずなのに」

悟はぶつくさいいながら、ケータイを鳴らし続け、ついでに帰り支度を終わらせた。

悟のようにケータイで親を呼ぶ者が多い。

だいたい4、50人入る教室には、半分ちよいも残っている。

『俺と同じ考えのヤツはいるんだな』

そう思ったとき、ふと悟は違和感を覚えた。

『どついうことだ……？』

そんなもの時計を見ればいいことだ。

9:37とデジタル時計が表示しているのだから。

だが、悟の疑問は募るばかりだ。

“俺は何分、こうして家の電話を鳴らしてる？”

もうとっくに留守録の電子音が聞こえてもいいはずの時間。

一度も切ってはいないし、電波表示のアンテナも3本立っている。

なのに、誰も出ないどころか、留守録に変わる気配もない。

コール音が段々気味悪くなってきた、悟は一度電話を切った。

なのに。

プルルルル・プルルルル・プルルルル……

ケータイは未だに鳴っている。

そしてそういう状況兄になっているのは悟だけではないらしい。

ここに居る全員が、そういう状況になっていたのだ。

ざわつきが、不安の色に染まっていく。

そして。

『 見つけた』

悟のケータイの音が止まった。

その瞬間に聞こえてきたのは、知らない人の、ささやくような声。

ケータイから声がしたはずなのに、まるで耳元で言われた感じがした……だが。

悟がそれを伝えることは無かった。

いやできなかった。

悟の意識はこのとき遮断されたのだから……

鎮魂課〈ケータイの浮遊霊〉（１）

「　　以上が前回、春日東高校の生徒を襲った霊とそれに関する詳細です。

なにか言いたそうだけど何ですかね、”紅琳……上司”」

紅いはかまに白い着物をきた少女、操が乱雑したデスクの向かい側に居る少女にニツコリと笑いかけながら問う。

お約束どおりの青筋浮かべて……。

今日の天気は雨。

かれこれ……3日だろうか。降り続けているのは。

お陰で久しく太陽を見ていない。

「ただでさえ、ここ肌寒いのに、こんな天気が続くの嫌ですよー」

操は上司である紅琳に身を乗り出し”耳元で”同意を求めるが

ずずっ・ずずずっ……

何の返答もなく、出前のラーメンを吸う音が聞こえるだけだった。

『返答を期待した自分が悪いか……』と操は自分の心に言い聞かせ、深いため息をつく。

ずずっ・ずずずっ……ずずっ・ずずずっ……

ため息に気づいているのかいないのか。

少女であり上司である紅琳こうりんは、美味しそうにひたすら麺をすすっている。

もう一度、大きくため息をついて操は自分のデスクへ乱暴に腰掛けた。

紅いはかまにシワが出来ようが知ったこっちゃないといった感じだ。

まあ、そういう点では源も同様なのだが。

さて。

ここは警視庁の地下2階にある”鎮魂課”。

鎮魂……その名の通り、霊的なものを成仏・または鎮めることを行う課である。

この現代に、そういった課があるということ自体不思議だが実は結構歴史は古い。

しかし、一口に『鎮魂してこい』といっても、『はい』といえるわけがない。

何らかの能力がなければ、鎮魂は無理だ。

だから人数もとてつもなく少ない。

現メンバーは、操と源そしてこの2人に仕事を押し付け、管理者である上司の紅琳のみ。

そして仕事も、給料も少ない。そりゃあもう、ものすごく。

その上、知名度も低い。

同じ警視庁の中でも、この課を知っている者は少ない。

そして信じている者も少なかった。

『現代に鎮魂するものなんて、あるはずない』

そう思い込んでいる者がほとんどだからだ。

霊を信じる人間など、滅多にいるものではない。

「しゃーねえだろーが。俺等みたいな能力がある奴がそこらへんにゴロゴロいると思うか？」

鎮魂しても俺等のことは伏せられる。色々期待する方が馬鹿なんだ

つつーの
「

自分の隣で冷麺を口にするパートナー（両者とも認めていないが）
みなもと源が操に対し、うざったそうに口を挟んでくる。

彼のバックにはつきりと『ばつかじゃねーの』と言う文字がはつきり見えるのはきつと気のせいではないだろう。

確かに源の言うことは真実だし、現実だ。

操もそれは認めている、が。

『~~~~言い方ってのがあんでしょーが！この餓鬼い……！！』

操の持つ割り箸に入るはずのない妙な亀裂がメキツと入る。

笑顔で源を見るオーラはなんとも不気味だ。キラキラしすぎて。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「なにがいいたい」

「なんだろーねー」

数十秒見つめられ、流石の源も操に根負けしたのか、はたまた面倒だから”仕方なく”相手をしたのかわからない。

だが、彼が沈黙を破ったのは確かだった。

眉間にしわを寄せながら、嫌そうに操に向き直る。

一方、操はキチンとシカトして、新しい箸を探しに席を立つ。

散らばった書類を踏み歩き、割り箸が入っている引き出しの中でゴソゴソと手を動かし探す姿は

どこかホームレスを連想させた。

操に限らず、この部屋の中で探し物をする時には誰もがホームレスになってしまう。

「……………じょーしー。せめて地下じゃなく、上の階に移動できないんか？」

操の姿が自分に重なったのだろう。

箸を置き、上司である紅琳に問う。

彼は紅琳のことを『上司』と呼ぶことを心がけている。

名前で呼ぶのには少しばかり抵抗を感じているようだ。

最も操は呼び捨てで紅琳と呼んでいる。

腹が立ったときだけに、紅琳上司と呼ぶようだ。

ずずっ・ずずずっ……ずずっ・ずずずっ……ずずずずずずっ……

わざとしか思えない食べ方に天を仰ぐ源。

もう汁しか残っていないのを知っているから尚更だ。

ふと操のデスクに目をやると、蕎麦は全く手がつけられてはない。

今の今まで上司に報告をしていたから当然なのだが……源の目が妖しく光ったのは気のせいか。

ちらりと操を盗み見て、こちらに來ないのを確認すると真っ直ぐに、操というターゲットを見据えて両手を伸ばし、

「我指示に従え……三神の紅き組紐」そう言い放つと、彼の前方に白い空間ができた。

白い空間に源は迷わず自身の両手をつまみ、”何か”を引き抜く

ように腕を動かす。

同時に操の身体が後方に反った。それは弓を連想させるように。

源が白い空間から腕を引き抜くと、操の身体は力なく前のめりになっ
ていく。

まるで源が操のことを動かしているようだ。

『 紅い組紐 』

息も絶え絶えになった操。その彼女が見た物は、自分のものの一部。

自分のものの一部なのに、自分で取り出すことができないものだ。

チリン！

鈴が鳴った。

と同時に貫かれた操の身体から紅い塊

鈴がはじき出た。

そして鈴はあつという間に姿を変え、

「呼ばれて現れ、ぱんぱかぱーんケーセツとーじょー！」

漆黒の長髪に、巫女姿の小さな小さな少女が操の身体から弾かれるように出現すると、

これを皮切りしたように、鈴が2つ飛び出てくる。

やはり巫女姿の小さな少女達。

ショートヘアで大人しそうな外見の少女と、セミロングに身体に似合わず大きな葉を持つ少女の2人。

3つ子なのか、3人とも顔は同じ。

違うといえば同じ巫女姿でも帽子についている鈴の数が違うのと髪の長さだけ。

「んで？ケーセツ達を何で呼び出したの？みー君」

ケーセツ……もとい蛍雪が、みー君こと源の顔に近づいた。

「普通は主人の身体からこんなに簡単にでてこねーぞ」

蛍雪のことを摘みながら呆れる源。

操は紅い鈴 『三神の鈴』^{みかみのすず}と呼ばれる物を産まれた時から体内に潜め、鎮魂時に使っている。

状況に応じてどの鈴を使うか決めており、言霊を唱え鈴の名を呼べば鈴の力が操自身につく。

先日の春日東高校時に鎮魂で操が呼んだ名は蛍雪。

紅蓮のように紅い色の棍棒の本来の姿は、源の目の前にいるわずか身長20cmの巫女少女なのだ。

「はーなーせーい！ みーくん、はなせー！」

「騒々しいんだよ、おめーは！」

ジタバタしながら五月蠅く喚く蛍雪と、特大青筋をうかべた源が大きな声で対抗する。

はたから見れば奇妙なコントだ。

「 旋風う！」

警視庁の地下2階で、突然の強風が源を通り過ぎた。

というより……源めがけて風が体当たりしてきた、と言う方が正しいかもしれない。

「……ってえなあぁ……何すんだ！ 葉っぱ娘！」

「葉っぱ娘じゃないもん、葉雪はゆきだもん！あつかんべー」

蛍雪をポイツと投げ捨てた源は、自分に風をぶつけてきた犯人、葉雪に怒鳴りつける。

だが、葉雪は帽子についた3つの鈴を心地よく響かせながら、源の周りを旋回し続ける。

小さい上にすばしっこいので、捕まえにくい。

苛々しながらも、源は手を葉雪に伸ばされる。

その速さもやはり速い。

彼女の武具は手にしている木の葉1枚。ただ1枚で風を自在に操り、周囲の風も味方につける。

源から逃げている時も風を使っているのでかなり早い。

第三者として見てみると、自分に付きまとう蠅の息の根を止めてやるのに必死と見える。

「で、源はん。お前さんはなにがしたいんどす？操はんの呪具で遊びたいんどすか？」

どんがらがっしょん！

こんな擬音語が汚く狭い部屋に響き渡る。

元凶である人物を源が忌々しそうに振り向いて、

「じょーし……いきなり割り込んでくるのはやめてくれって」

「自業自得というものでやっしやる、源はん。ほいで操はどうですのん、雪花^{せつか}」

源の抗議をさらりと交わすのは、操と源の上司である紅琳。

身長も顔つきも行動も子供じみているくせに、自分達より年を食っているよくわからない上司。

巫女姿ではなく、紅い派手なチャイナ服、明るい茶色のセミロングは解かした様子が見えず、

四方八方に飛び跳ねている。どうみても、たった今起きた子供だ。

その紅琳が言った雪花とは、蛭雪、葉雪に続く3つ子の次女。華奢な身体の割りにかなりの体術の持ち主であり、紅琳や操が心から頼りにしている少女だ。

「……もう少しで組紐手放すところだったんすけど」

「そやたら、こーちゃんが組紐の主になるだけのことですしやる。」

源はんより素質はありまっからな」

こーちゃん……こと紅琳が楽しそうに源に返答しながら、デスクを飛び越えて源に近づき馬乗りになる。

紅琳は自分のことを自ら『こーちゃん』と言う。

どんな時でも『私』、『あたし』などという単語は出ない。

……脳みそまで成長が止まっているのだろうか、かつて操と話したことがあるのを源は思い出す。

そんな記憶は今いないのに。

チャイナ服の裾から白い足が伸びている。辺りが暗いせいで、色がうかびあがっているようだ。

なにもかもの成長が止まっているとはいえ、自分より年上だということ源は忘れない。

ほんのりと頬を染めて何かいいたそうに紅琳に反撃をしようとするが彼女がそれを許すはずが無い。

馬乗りしたまま顔を近づけ、あと数センチで源の口を塞げる状態に位置した紅琳。

だが口は塞がずそのまま話し始めた。

「もし、今ので三神の組紐を手放していたら……あーた殺人犯になりますなあ。そして」

「……てる！わーってるよ紅琳上司！」

埃だらけの部屋に紅琳に押し倒された状態で叫ぶ源の声が大きく響く。

その剣幕は先程までの表情とはまるで違っていた。

今はもう、恥じらいはみせない源。押し倒されたまま真っ直ぐに上司を射抜くまなざしを向けた。

そのまま数秒2人の間に流れる空気がピリピリとしていたが、どちらも口を開かない。

「……あの、組紐を操さまにもどしてくれませんか？源さま」

帽子に2つの鈴をつけた次女、雪花が口を挟まなければ2人の睨み合いは決着がつかなかっただろう。

両者とも無言で立ち上がり、紅琳はデスクへ源は操の元へと歩いていく。

「わかってるうの、源」

ふいに紅琳が源の背に声をかけると、源の足は止まった。

「今のお前は操の主といっても過言でなのじゃ それをお主が取り出せる限りの」

後半の台詞が組紐のことを指していることは重々分かっていた。

源は返事をせずにまた歩き出す。それが答えだとも言うように。

組紐を握る手に力が入ったことに本人は気がついていない。

「紅琳さま、遊びすぎでは？」

「こーちゃんはうしろめたいことないアルね」

源が操の元へたどり着くまで雪花と紅琳はコソコソ話していたが

プルルルル……

こういうときに滅多に使われない電話が鳴るのは迷惑この上ない。

「はいはい。鎮魂課管理者こーちゃんですが」

紅琳の電話の出方のほうが迷惑かもしれない……

ファイル2（後書き）

操や源、そして紅琳を出したかったため依頼は次回に持越しです。
この説明で3人の人物像が浮かぶ人はいないだろうなあ；
では、依頼編はまた次回です。

……操の蕎麦、どうなったんだろう……

R
u
e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6080a/>

鎮魂課

2011年4月17日07時56分発行